

## 異種混交の寓話 : ゲーリー・スナイダーにおける野 生の詩学

高橋, 勤  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1931498>

---

出版情報 : 英語英文学論叢. 68, pp.1-13, 2018-03-12. Department of English, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

# 異種混交の寓話

— ゲーリー・スナイダーにおける野生の詩学 —

高橋 勤

はじめに

2005年、アメリカ文学環境学会の大会がオレゴン大学で開催されたときのことである。特別講演に招聘されたゲーリー・スナイダー（Gary Snyder）は、とんでもないジョークで聴衆を出迎えた。「60年代われわれはフリーセックスについて議論しました。21世紀のいま、異種との結婚（interspecies marriage）を話題にしてはどうでしょうか」。

スナイダーらしい挑発的なジョークであったが、不思議なことに会場は水を打ったように静まり返り、なかにはスナイダーの言葉を鼻であしらうような反応すら聞かれたのである。北カリフォルニアの山中に暮らし、60年代はヒッピー文化の詩人として知られたスナイダーである。そんなかれからどんな挑発的なジョーク、ほら話が飛び出してもおかしくない、聴衆たちはそうタカをくくったにちがいない。

いっぽう、この挑発的なジョークには、多くの聴衆が見逃した、ひとつの詩的眞実が含まれていた。「異種との結婚」、つまり異種混交のモチーフは世界中の民話や神話など想像の世界において広く伝播されており、そうした詩的眞実をふたたび現代において議論することの必要性をスナイダーは提起したからである。周知のとおり、スナイダーの『野生の実践』（*The Practice of the Wild*）の8章には「熊と結婚した女」（“The Woman Who Married a Bear”）というアラスカ南部、トリンギット族に伝承される異種混交譚が挿入されている。スナイダーはかつての対抗文化の旗手らしい挑発的なジョークで聴衆を出迎えながら、現代を生きるわれわれにとってもっとも重要なテーマを送り届けようとしたのである。

それでは、スナイダーにとって「異種との結婚」というテーマの重要性とは何なのか。なぜ21世紀のいま異種混交のモチーフを火急のテーマとして論じる必要があると言うのだろうか。

## 1 「熊と結婚した女」

スナイダーが『野生の実践』に挿入した「熊と結婚した女」という物語は、アラスカ南部沿岸地方のアサパスカン・インディアンに伝承された神話に基づくものである。スナイダー自身の説明によると、この物語はマリア・ジョーンズ (Maria Johns) というトリンギット族の血をひく女性の聞き語りであり、キャサリン・マックルラン (Catherine McClellan) という文化人類学者によって編纂された『熊と結婚した少女—インディアン口承伝統の傑作選』(The Girl Who Married the Bear: A Masterpiece of Indian Oral Tradition, 1970) の中の一編であるということだ。

熊との交婚という異種混交のテーマは北米先住民の口承文化ばかりか、ユーラシア大陸、シベリア、日本、朝鮮半島、中国にまで幅広く分布する。朝鮮半島では、皇帝ファンウンが熊女と結婚したという伝説が伝わっており、日本のアイヌ民族の間では熊がカムイと崇められ、部族の祖先と見なされた伝説も残されている。

大林太良の研究によると、熊男ないしは熊女との交婚を描いた神話・伝説は、華北、満州から樺太にかけて、さらにはソ連のアムール河流域からクズネツク地方にまで分布し、おもにツングースの神話に共通するモチーフであるということである (大林 346-54)。大林は朝鮮半島の檀君神話とツングース神話を比較検討し、その系統的連続性を示唆しているが、アサパスカン・インディアン神話もツングース神話と多くの類似点を有している。

スナイダーに戻ろう。スナイダーは熊との異種混交を描いた多くの神話伝説のなかから、なぜアサパスカン・インディアン神話を選択したのだろうか。マリア・ジョーンズというトリンギット族の血をひく女性の物語が、『野生の実践』に綴られた野生の考察にどのような意味合いを投げかけるのか。さらに異種混交の議論がなぜ21世紀を生きるわれわれに不可欠だとスナイダーは考えるのだろうか。

マリア・ジョーンズによって語られた物語の前半はギリシャ・ローマ神話のプロセルピネの物語を想起させ、より普遍的原型にもとづく物語であるといえるかもしれない。十代の思春期を迎えた少女が母や姉や叔母とベリー摘みに出かける。反抗的な一面をもつこの少女は、大人の言いつけに背いて熊の糞を跨ぎ、軽はずみな言動をくり返す。午後遅く母たちが帰り支度を始めても、少女はベリー摘みに熱中している。母たち

の後を追って家路につこうとした少女は、籠のベリーをこぼしてしまう。そしてベリーを拾い集めているところを男に呼び止められる。男はさらに多く大きなベリーの見つかる森の奥へ少女を誘い入れる。夕闇が迫ると二人は寝場所を探し、一緒に暮らし始める。

マリア・ジョーンズの語りとプロセルピネの挿話との相違点は、この物語がたんに幽閉と解放、監禁と救出をテーマとする物語ではなく、より複雑で悲劇的なアイデンティティの問題へと進展する点である。冬になると女は身ごもり穴の中で二人の子供を出産する。夫の正体が熊であることに気づいた女は、熊男の元にとどまりながら、意図的に目印となる痕跡を残し、村人に知らせようとする。やがて春になり、村の兄弟が山にやってくる。そして熊が殺される。ところが女は解放されたわが身を喜ぶどころか、熊男の言いつけどおり弔いの歌を歌い、殺された熊の頭と尻尾を焼いて死の儀式を行うのである。故郷の村に連れ戻された女と子供は人間の世界に馴染めない。翌春雌熊と二匹の子熊が殺されたとき、女は兄たちから熊の毛皮を身にまとうよう強いられる。毛皮をまとった彼女は熊に変身し、心優しい弟を除く家族全員を殺してしまう。

このトリンギット族の神話にかんして「生態学的な観点から、また語源学上の観点から神話分析」を行ったスナイダーはあるインタビューで語っているが、物語の解説部ではアラスカ地方におけるヒグマの生態——食性や生理的サイクル——が語られている。じっさいスナイダーは物語の生理的、身体的要因に注目しているように思われる。たとえばこの思春期の少女は当初からイタズラ好きで「野生的なものに惹かれている」(Practice 163)。バスケットからこぼした赤いベリーは彼女の身体的成熟を示唆するものだろう。その証拠にかがんだところを、熊男に誘惑されている。少女がこの熊男と結ばれた時、「彼女の乙女の夢は充足された」(Practice 165)、そうスナイダーは解釈を補足するのである。

しかしながら、この異種混交の物語はわれわれの期待を裏切るかのように、精神的な結合へも、またサチュロ的な祝祭の機会へも発展しない。むしろ異種混交に伴うアイデンティティの危機とともに、野生と人間社会の葛藤と断絶がテーマ化されているのである。スナイダーにしても、その想像力がもっとも刺激されたのは（そしてこのヴァージョンを特別に選択した理由も）、迫りくる悲劇の予感であり、その文学的象徴性ではなかつたらうか。熊は女を娶ることでシャーマンに変身し、死の

結末を予告する。かれが口ずさむ歌は弔いの歌でもある。物語を締めくくるのは家族の凄惨な死である……。

先に触れたツングースの民話のなかにはこのアサパスカン・インディアンの神話ときわめて類似した物語が存在する。大林が引用したイェニセイ・エヴェンキ族の神話をここに紹介してみよう。

「熊が一人の少女を遊牧民の野営地からさらい（ある異伝によれば、地上に生活した最初の女であり、他の異伝によれば、河岸で百合の根を掘っていた何人かの少女のうちの一入である）、そして彼の妻にする。後になって彼は森の中の野営地の火のそばで彼女の兄弟に出会ったが、彼は矢をもって熊を傷つけて殺す。死にながら、彼は死の歌の中で、彼は彼を殺した男の義兄弟であることを告白し、そしてその狩人によって葬られる（つまり皮が剥がされる）のではなく、熊氏族、つまりこの狩人の義兄弟の氏族の誰かによって葬られることを希望する。」（大林 347）

「熊と結婚した女」とツングース神話群との共通点は、熊男あるいは熊女が殺され、人間との関係性が悲劇的な結末を迎えていることである。とくに交婚によってもたらされた義兄弟という関係性が強調されている。アサパスカンの神話では「かれらはあなたの義兄弟です。もし私を本当に愛しているのなら、かれらも愛せるはずです。だからかれらを殺してはなりません。かれらに殺されなさい」と女が熊に嘆願する場面が描かれており、これをスナイダーは「義兄弟で争ってはならない」というアサパスカンの厳格なルールにもとづくものだと解説している（*Practice* 167）。他方において、この義兄弟のモチーフは狩るものと狩られるものとの明確な区分を示したものでもあり、人間社会と野生とのこえがたい溝を示唆するものでもあったろう。

さらにもうひとつの顕著な共通性は、弔いの儀式が強調された点である。ふたつの神話群に共通して語られた死の歌のモチーフが異種間の儀礼を示すことは明白だが、それは熊によって象徴されたものが自然の生命力や豊穡さであることと無縁ではない。日本や韓国の熊祖伝説に顕著なように、熊は自然の豊穡さを体現する存在であり、そのいのちの代償として弔いの儀式や死の歌が捧げられたのである。

## 2 スナイダーの解釈

「熊との結婚」、この異種混交のテーマはどのような象徴的意味を孕んでいたのだろうか。物語の前半が思春期の生理的不安を反映したものであることは明白であるとしても、異種との混交によるアイデンティティの危機と、それにつづく悲劇的な結末はどのような教訓をもたらすものなのか。もしこの物語が野生と人間社会の埋めがたい溝、その決定的な断絶をテーマ化したものだとなれば、まずもってなぜ異種混交を論議する必要があるのか。スナイダーの主張する〈野生の文化〉(すなわち自然と文化の一元的な融合)という観点からすれば、この物語が示唆する異種間の断絶はどういう意味をもつのだろうか。

スナイダーは「熊との結婚」の物語を分析する上で、「深層エコロジー」という考え方を提起している。あきらかにアルネ・ネスの「ディープ・エコロジー」を意識した考え方だが、ディープ・エコロジーが基本的に人間中心主義を排した異種間の平等を原則とするのにたいして、「深層エコロジー」が問題とするのは、「神話や民話、あるいはシャーマニズムの思考にみられる他の生きものとの接し方の領域」(*Nobody Home* 36-37)であり、そのエチケット(不文律)だと言うのである。スナイダーが「深層」という言葉にこだわったのは、人間の立場からみたより「ディープ」な平等主義ではなく、多分にアニミズム的な世界観、人間の心理の深層、そして有史以前の神話性と文化的根源性を暗示するものであったろう。

この「深層エコロジー」という観点からすると、このトリンギット族の挿話にはふたつの対照的な異種への態度が描かれていることに気づかせられる。ひとつは少女の熊にたいする接し方であり、もう一方は村人、とくに少女の兄たちの対応である。熊と暮らしはじめた少女は熊を愛し子を孕む。熊が殺されると、教えられたとおり、頭と尻尾を掲げて弔いの歌を歌うのである。スナイダー自身の解釈によると、熊と暮らしはじめた少女は「人間でもない、またまったく動物でもない境界の世界(the in-between world)」の住人となる(*Practice* 165)。それは新たな自覚というのではなく再認識の過程であったはずである。なぜなら「われわれはつねにふたつの世界に身を置いた」状態にあり、いや両者はじっさいに「ふたつに区別されない」からである(*Practice* 165)。女は熊を愛し子を孕みながら、他方において村への執着を断ち切れない。熊もまたふたつ

の世界に突き落とされる。女と暮らしはじめることで熊はシャーマンに変身し、熊と人間、死と生の間を行き交うのである。熊は女に懇願されたとおり、兄を襲うことなく殺されてしまう。

いっぽう、女の兄たちはこうした人間と熊の「深層」のつながりを理解しようとしな。他のいきものにたいする共感や想像力を決定的に欠いているのだ。その卑劣さと傲慢さは、殺したばかりの母子熊の毛皮を女に押しつけ慰みものにする態度に典型的に示されている。しかも嫌がる妹の不意をついて（“sneak up”）無理矢理まとわせるのだ。あらゆるルール破りのなかでもこそそと不意をつく行為（“in a sneaky way”）は悪徳であるとスナイダーは解釈するが（*Practice* 164）、そうした卑劣さの当然の報いとして兄たちは熊の復讐を受けるのである。

この「熊と結婚した女」という物語が異種間の儀礼をめぐる伝承の起源を示唆していることは明白であろう。自然との関係性における贈与と返礼。そして「深層」意識の欠如によってもたらされた人間の側のルール違反と悲劇的な結末。この物語はそうした関係の相互性を描いた「不文律」の寓話であり、スナイダーの言葉を借りれば「熊の世界から人間の世界へ女をとおして教えを受けること」（*Practice* 165）を目的としたものだったのである。

スナイダーが注目した「深層エコロジー」とは想像力における「他のいきものとの接し方の領域」であり、その「不文律」であったのだが、『野生の実践』の第1章は「自由の不文律」（*The Etiquette of Freedom*）というタイトルが付されている。ここに書かれた「自由」が「野生」と同義であることは明白だが、その「野生の教訓」（*Practice* 4）のひとつとして「人間ばかりではなく、すべてのいきものにたいして不必要な害を与えぬこと」、「われわれはケチ（stingy）であってはならず、他のものを搾取することのないよう生きなければならない」（*Practice* 4）とスナイダーは指摘し、人間中心主義、その孤立した理性中心主義にたいして警鐘を鳴らしている。

「熊と結婚した女」の兄たちの対応がこうした「搾取」や「吝嗇（ケチ）」を代表したことは言うまでもないが、スナイダーは同じアサバスカン族の教訓の事例を挙げながら、「思考の吝嗇」、すなわち共感と同情の欠如について説明する。

An ethical life is one that is mindful, mannerly, and has style. Of all moral failings and flaws of character, the worst is stinginess of thought, which includes meanness in all its forms. Rudeness in thought or deed toward others, toward nature, reduces the chances of conviviality and interspecies communication, which are essential to physical and spiritual survival. (*Practice* 21)

生物界のエネルギー循環、いのちをめぐる贈与と返礼のプロセスにおいて浪費や粗暴さは不文律に反する悪徳であろう。さらに思考や感情、そして想像力における「吝嗇」は「異種間のコミュニケーションと祝宴の機会」を奪い去り、人間の生命と精神の「存続」(“survival”)を脅かすものとなる。生命の「存続」が種の多様性とその相互作用によって担保されているように、人間精神の健全さは言語や文化の多様性とその活発な活動によって保たれるのである。

スナイダーの『野生の实践』が文化人類学的な考察と視野のひろがりをもつことは自明だが、レヴィ＝ストロースの『野生の思考』には「野生」の概念を栽培思考と対比した、興味深い一節がある。「私にとって『野生の思考』とは、野蛮人の思考でもなければ未開人類もしくは原始人類の思考でもない。効率を昂めるために栽培種化されたり家畜化された思考とはことなる、野生状態の思考である」(『野生の思考』262)。レヴィ＝ストロースはこの一節につづけて、文化面における野生と栽培の区分、あるいはその共存について論じるのだが、おそらくかれがもっとも懸念するのは、経済効率を優先した栽培思考、なかでも単一栽培が先鋭化して、生物学的にも、また文化論的な意味合いにおいても多様性が失われるリスクであったと思われる。さらにかれは「“未開、思考と“文明、心性」というインタビュー録において、「地球上いたるところ、ただ一つの文化、一つの文明だけになる時代を私たちはいまや容易に想像することができます。(中略)しかし人類がほんとはなんらかの内的多様性なしに生きうるとは思えないのです」(『神話と意味』27-28)とも語っている。

### 3 ソローの影響

熊との結婚という異種混交のモチーフは、文字どおり、人間(若い女



性)が野生の化身である熊と交わり、子を孕み、そして野生化するという話である。スナイダーは人間社会(村)と熊との悲劇的な葛藤という文学的モチーフに惹かれながら、他方において、その両者の一元的な融合を肯定し、新たな野生の文化の創造に夢を託したように思われる。そしてそれが21世紀において異種混交を論じる必要性と直結したと考えられるのである。

そのひとつの根拠としてここでスナイダーにおけるソローの影響力を考えてみよう。スナイダーにおける野生の考察がソローの「ウォーキング」(“Walking”)におおきく依拠した事実はいまさらくり返す必要はない。じっさいスナイダーの『野生の実践』は「ウォーキング」に示されたソローの野生論の延長線上で書かれたものであり、エコロジー思想という今日的課題の観点から考察されたものである。

Thoreau says, “give me a wildness no civilization can endure.” That’s clearly not difficult to find. It is harder to imagine a civilization that wildness can endure, yet this is just what we must try to do. Wildness is not just the “preservation of the world,” it is the world.... We need a civilization that can live fully and creatively together with wildness. (*Practice* 6)

「熊と結婚した女」という異種混交のモチーフも、ソローが言及した異種混交のイコン的イメージ——オオカミに授乳されるロムレスとレムス——の変奏であったと考えられないか。すなわちスナイダーにおける異種混交のモチーフは、ソローの作品に描かれた野生の、異種なる母性と共通するテーマであったと考えられるのである。

「ウォーキング」で言及されたロムレスとレムスの伝説は、周知のとおり、ローマ帝国の建国神話であり英雄神話である。オオカミの母性が示唆したものは自然の逞しい生命力であり、それが偉大な文明・国家の建設に不可欠であることを示唆したものであった。従来「ウォーキング」の「野生のなかに世界を保存するものがある」という一節はしばしば文明にたいして野生的な自然を保護することの必要性を論じたもののように解釈されてきたが、より本質的には、文明社会の健全な進展には野生すなわち「母なる自然」が不可欠であるという、一元論的な思考を述べたものであったのである。つまり、文明、文化の基層としての自然の重

要性を論じたものであり、その根源的な活力が問題とされたのである。

さらに「ウォーキング」の後半部においてこの母オオカミのイメージは野生論の核心的なメタファーであるメスヒョウ、さらにその「黄褐色の文法」(tawny grammar)へと展開されていく。ソーローは野生的な自然を「メスヒョウ」として擬人化し、文明社会に暮らすわれわれの存在があまりにも早くそのメスヒョウの乳房から切り離されて、「母親の知恵」である「黄褐色の文法」を見失ってしまったと言うのである。

周知のとおり、スナイダーの『野生の実践』の第3章には「黄褐色の文法」というソーローの用語がそのままタイトルに用いられている。さらに後半部には「母ヒョウ」という見出しもあり、スナイダーがソーローの「ウォーキング」を下敷きにして論を進めていることが理解されるのだが、その結末部にはソーローの言葉が直接引用されている。

Thoreau wrote of “this vast, savage, howling mother of ours, Nature, lying all around, with such beauty, and such affection for her children, as the leopard; and yet we are so early weaned from her breast to society,” Is it possible that a society as a whole might stay on better terms with nature, and not simply by being foragers? Thoreau replies: “The Spaniards have a good term to express this wild and dusky knowledge, *Gramatica parda*, tawny grammar, a kind of mother-wit derived from that same leopard to which I have referred. (*Practice* 76)

「熊と結婚した女」という先住民の神話における異種混交の寓話は、こうして母オオカミに授乳される野生児の神話にも、また母なる自然のシンボルとしてのメスヒョウにも結合されていたことが理解できるのである。

#### 4 野生の教育論

「黄褐色の文法」をより深く理解するひとつの道すじは、言語のグラマーと野生の知恵のグラマーを比較することであろう。さらにその自然の知恵が習得される過程をより細かく観察し、人間社会の文化との接点を見究めることである。

ソーローが述べた「黄褐色の文法」とは自然の教育論であり、制度化された学校教育と対比的に捉えられた考え方だった。そのグラマーとは

「カドマスが発明したもの」、すなわちアルファベットという記号のコードとは異なり、学校教育では教えられない思考と行動のルールであったのだ。他方において、スナイダー『野生の実践』の3章「黄褐色の文法」に述べられた内容は、より具体的に、アラスカ州ユーコン川の支流、コブックの学校を訪れた体験に基づく教育論である。イヌピアク語でクヴァンミュートとよばれる部族の子どもたちは、将来的に、狩猟を中心とした自給経済の暮らしと、伝統的な「祖母の知恵」を必要とするのか。あるいはまた、鉱山開発によるより豊かで安定した暮らしと、合理的な資本主義の論理を学ぶべきなのか。この二つの相反する価値をめぐる省察である。

スナイダーの議論は、かならずしも文明社会の論理を否定し、自然生活に根ざした「祖母の知恵」を持続的に擁護するという方向には向かわない。イヌイトの子弟のおおくがすでにコンピュータやテレビの文化に親しみ、狩猟にはスノーモービルやライフル銃が欠かせない。むしろ現代におけるイヌイトのライフスタイルにおいて、そうした科学技術は実用的でさえあるのだ。スナイダーが問題としたのは、二元論的な思考の限界、自然にたいして精神文化を優位に位置づけ、人間存在を自然から切り離し抽象化してしまう思考法の危うさである。合衆国における進歩思想や「科学的な客観性」の無自覚な信奉が「ただ『自己』と『世界』のみ」の、きわめて単純化された二元論のなかに思考を押しこみ、人間存在を「抽象物のなかの退屈な囚人」としてしまう傾向がある事実を指摘したのである（*Practice* 60）。だからこそ「祖母の知恵」、すなわち一元的な思考が必要だと言うのである。

たとえば「黄褐色の文法」のセクションでスナイダーが論じているのは「自然の本」（*Book of Nature*）という、キリスト教の精神文化に基づく西洋的な考え方と、「自然が書いたもの」（*Nature's Writing*）という考え方の対比である。

Metaphors of “nature as Books” are not only inaccurate, they are pernicious. The world may be replete with signs, but it’s not a fixed text with archives of *variora*.... Those with writing have taken themselves to be superior to people without it, and people with a Sacred Book have put themselves above those with vernacular religion, regardless of how rich the

myth and ceremony. (*Practice* 69)

「自然の本」という考え方は自然を寓意化し、精神の働きのなかに抽象化してしまうものだが、スナイダーはむしろ自然の具体的な形状や痕跡に注意を払い、自然そのものが織りなすテキストのなかにグラマーを発見しようというものである。そしてそのグラマーが人間の文化に浸透し顕現する事実を指摘するのだ。岩石の層、泥地にうずもれた花粉の層、年輪、蛇行する川の「書」、これらすべてが自然の記した「書きもの」であり、その意味作用のルールを読み取ること、いやわれわれの思考や存在そのものが「祖母の知恵」に凝縮された自然の「文法」に影響を受けていることを自覚する必要があったのである。

ソローの「ウォーキング」から「黄褐色の文法」の一節を引用したスナイダーは、それにつづけてつぎのような断想を語っている。

The grammar not only of language, but of culture and civilization itself, is of the same order as this mossy little forest creek, this desert cobble. In one of his talks Dogen said: “To carry yourself forward and experience myriad things is delusion. But myriad things coming forth and experiencing themselves is awakening.” Applying this to language theory, I think it suggests that when occidental logos-oriented philosophers uncritically advance language as a unique human gift which serves as the organizer of the chaotic universe—it is a delusion. The subtle and many-layered cosmos of the universe have found their own way into symbolic structure and have given us thousands of tawny human-language grammars. (*Practice* 76-77)

スナイダーによると、グラマーというのは言語のなかばかりではなく、文化にもまた文明のなかにも存在し、それば自然の事物と同じ秩序に従っている。言語を特権化した西洋のロゴス中心的思考は「幻想」にすぎず、文化や文明のグラマーもまた周囲を取り巻く自然の法則を映し出したものであり、その「象徴的な構造」として発生的に顕在化したものであったのである。

哲学や文学というものがそうした自然界の「物語」と「文法」に隣接する事実を認識し、その密接な関係性を自覚すること。言語や人間の精

神文化を無自覚に抽象化してしまわぬこと。「祖母の知恵」とは場所の知恵であり、身体とコミュニティの知恵である。「哲学とはこのように場所に基づく思考である。それは身体と心から生まれ、共有された経験によって吟味されるものである」(*Practice* 64)。というのも、「自己と文化の紡ぎもののなかに野生的な自然が分かちがたく入っているからだ。(中略) 将来への対話はあらゆる生物を含んだ、いわば生態学的関係性のレトリックに向けられるだろう」(*Practice* 68)。「生態学的関係性のレトリック」、それは「黄褐色の文法」であり、さらに異種混交の論理でもあったのである。

アラスカのユーコン川の流域には、河川の原始的な風景が広がっている。河川はその年々の流れのままに土地を浸食しては蛇行をくり返し、周辺には忘れ去られた形見のように三日月湖が散乱している。コブックの村で子どもたちの教育について省察を重ねたスナイダーだが、「自然が書いたもの」の具体的なイメージとしてユーコンとその支流の蛇行する川が想起されていたことは疑いのない事実であったろう。

蛇行する川の形状が「書」(calligraphy)つまり文字に見立てられたのだが、それと同様に想起されたのが言語の「野生的な」生態であり、そのフィロロジカルな風景であった。「言語における幾重にも重なる歴史の層が、言語そのもののテキストなのだ」(*Practice* 66)。スナイダーはこの蛇行する川と言語の歴史の連想を『野生の実践』の冒頭においても同様に語っている。

Languages meander like great rivers leaving oxbow traces over forgotten beds, to be seen only from the air or by scholars. Language is like some kind of infinitely interfertile family of species spreading or mysteriously declining over time, shamelessly and endlessly hybridizing, changing its own rules as it goes. (76-77)

蛇行する川という曲線のイメージで語られた言語と文化のグラマーは、現代の合理主義的な、均一化された文化そして学校教育のグラマーと明らかに対比されていた。ここで学校教育にたいするソローの痛烈な批判を想起してもいい。「教育がおおかたやることと言えば、自由に曲がりくねる小川を真っすぐな水路に変えてしまうことである」(*Journal* 3:

130)。

21世紀を生きる現代人には異種混交が必要だとジョークまじりに語るスナイダーだが、その背景には、言語・文化というものが歴史的に「恥もなく、果てしなく異種混交」をつづけた所産であり、そうやって生命力を維持してきたという認識があったと思われる。それが異種混交というテーマの詩的眞実であり、今日における重要性であったのである。

### Works Cited

- Snyder, Gary. *Nobody Home: Writing, Buddhism, and Living in Places—Gary Snyder in conversation with Julia Martin*. San Antonio: Trinity University Press, 2014.
- . *The Practice of the Wild*. New York: North Point Press, 1990.
- Thoreau, Henry David. “Walking.” *Wild Apples and Other Natural History Essays*. Ed. William Rossi. Athens, GA: University of Georgia Press, 2002. 59-92.
- . *The Writings of Henry D. Thoreau: Journal 3*. Ed. Robert Sattelmeyer et al. Princeton: Princeton UP, 1990.
- 大林太良『東アジアの王権神話——日本・朝鮮・琉球——』弘文堂、1984.
- レヴィ＝ストロース、クロード『神話と意味』大橋保夫訳、みすず書房、1996.
- .『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房、1976.